

「リスクコミュニケーション」の議論を踏まえて 専門家, メディア, そしてリスク

140626@食品安全委員会

田中幹人

mikihito.tanaka@gmail.com

早稲田大学政治経済学術院 ジャーナリズムコース 准教授

(社) サイエンス・メディア・センター リサーチ・マネージャー

「リスクコミュニケーション」の難しさ

震災後、改めて繰り返されていることは：

「リスクコミュニケーションが大切だ」

…この「リスク」は、どういう意味なのだろう？

リスク＝ハザード × 確率（工学）？

リスク＝ハザード × 曝露（医学・理学）？

リスク＝ハザード + 感情（社会科学・心理学）？

→最後の「感情」を扱うのが「リスクコミュニケーション」。
社会心理学や社会科学によって綿密な研究が為されてきたが、
日本では極めて手薄（専門家も少ない）。

∴専門家の大半は気付かぬうちに啓蒙的発想に陥り、自分たちの
周辺でしか通用しないリスク概念を押しつけてしまう。

「リスク」の3つの側面：後二者を意識する必要性

1) 科学的意味での「リスク」：科学技術的視点

☑ 一般的なリスク定義：「危険要素(hazard, ハザード)によって引き起こされる被害(harm)の発生確率(probability)」

→ リスク = ハザード × 確率

2) 社会学・政治学的な意味での「リスク」：行政的視点

☑ リスクは個人を取り巻く社会的文脈によって異なる意味を持つ

☑ リスクは（社会的弱者に対して）不平等に分配される

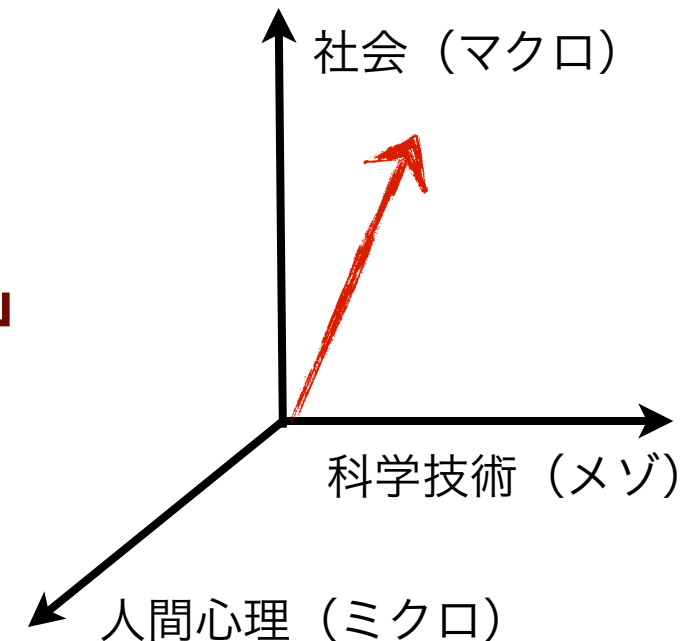
cf. 階級依存的なリスクの割り当て

☑ リスクは発明・発見される

3) 心理学（社会心理学）的な意味での「リスク」 ：市民（生活者）視点

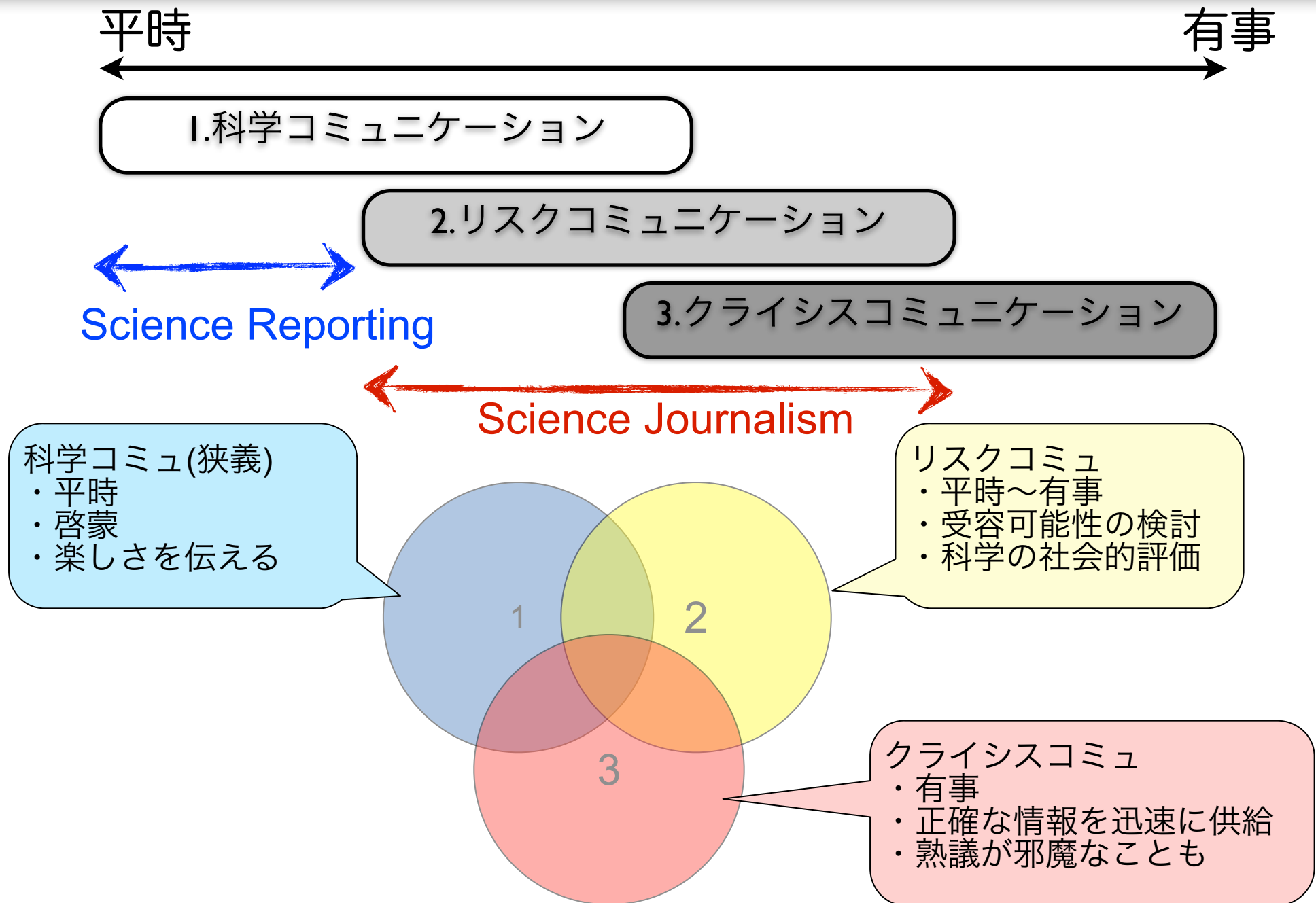
☑ 我々はどのようにリスクを認知しているか？

☑ リスク選択はどのように行われるか？



Hirakawa(2014). edited

異なるコミュニケーション位相を考慮する必要がある



リスクは「発明」も「発見」もされる

【リスクの「発明」】

科学技術の進展により存在しなかったリスクが発明される

ex. 再生医療, 新薬の社会投入など

【リスクの「発見」】

測定技術の向上, 疫学調査の成果, 医学上の発見などにより知られていなかったリスクが発見される

ex. 食品の発がん性, ワクチンの副作用など



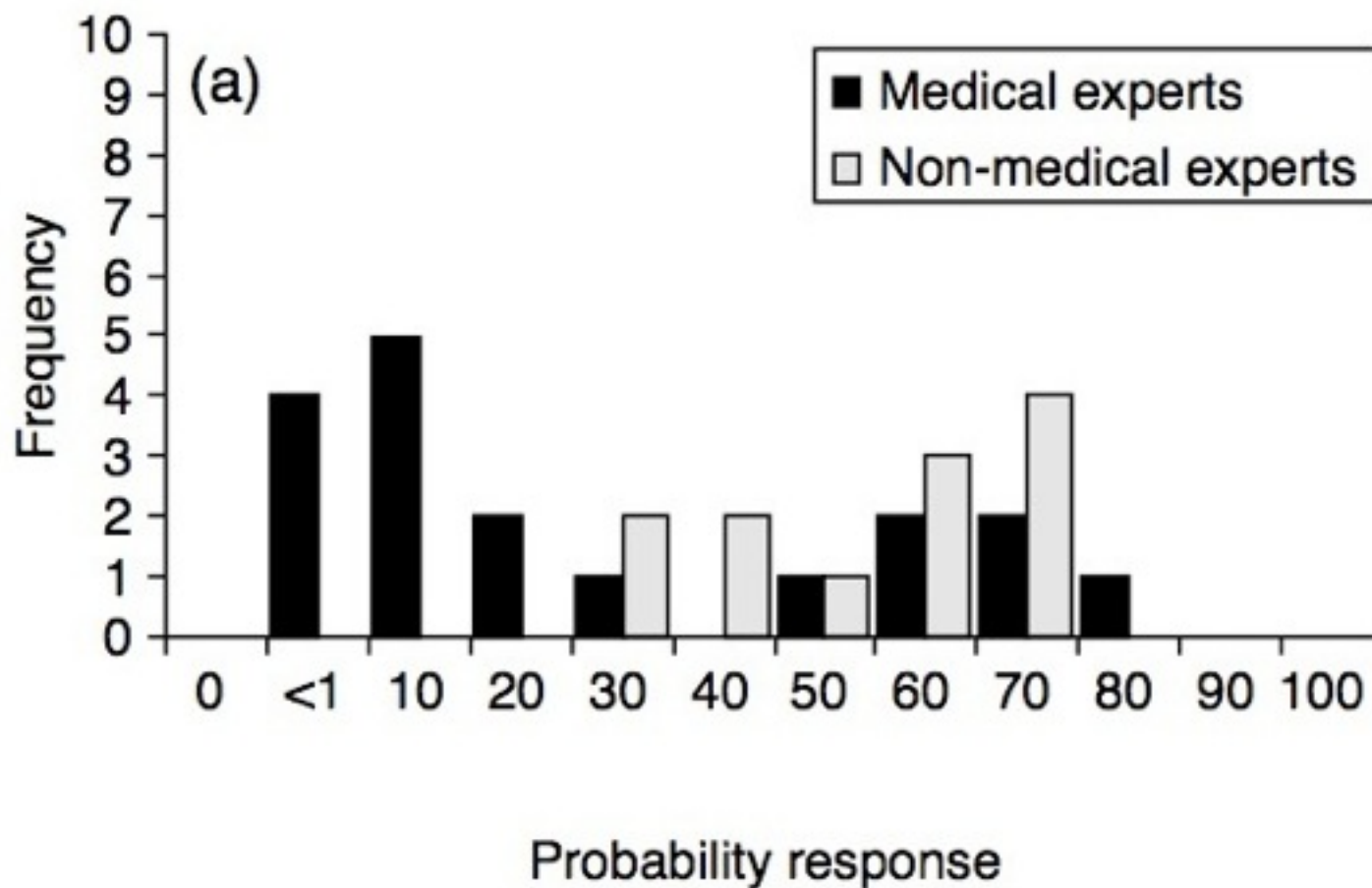
リスクは社会に論争をもたらす



リスク論争の段階	問題の性質	コミュ・ニーズ	ポイント
1.専門的な知識の分配と普及 -科学コミュ&リスクコミュ(ケア) -	ハザード程度, リスクの生起確率	情報の伝達	・ 分かりやすい情報 ・ 公衆への接近 ・ 公衆関心への注意 ・ 問題フレームの理解
2.リスク対応機関の信任問題 -リスクコミュ(コンセンサス) -	リスクとベネフィット配分, 対応機関の信頼性	利害関係者 及び 公衆との対話	・ 危機対応の標準化 ・ 業績の達成 ・ 公衆の要求理解 ・ 定期的対話
3.価値,世界観を巡る闘争 -クライシス&カタストロフィ-	科学的専門性,対応 機関能力,情報公開 いずれも無力	対話と調整	・ ステークホルダーの参加 ・ 強制でない合理的対話 ・ 明確な権限と正当性の付与

OECD Background paper: Risk Communication Management (2000), 吉川ら(2009)を元に改変

そもそも”専門家”のリスク見積もりも一致しない！



パンデミックH5N1のリスクに対する専門家のリスク見積もりの分布。非専門家はリスクを高く見積もる傾向がある一方、専門家は基本的にリスクを低く見積もるが、一部が極端に高く見積もる、と2極化する傾向にある

(W. Bruine De Bruin et al.,2006)

原子力関係の研究者はバイアスがかかっていることが非常に多いのでアテにしていない。311以降にわか勉強した理学系の人の方が中立的でノイズが少ない。

(震災後のSF作家・野尻泡介氏のツイート, 2011/7/5-0:10)

人間はリスク情報についてバイアスがかかる

リスク認知が高まるハザード条件

- ☑ ハザードが望まざるかたちで個人に降りかかったときや、制御不能なとき、取り返しがつかないとき (ex.地下水の汚染による井戸水の有毒化)
- ☑ (長期的に進行する病気などとは異なり) 不明確で間接的なものではなく、被害の有様が容易に想像できるとき (ex.死傷が予想可能)
- ☑ 多くの人々に対する影響が予想されるとき (ex.大規模自然災害)
- ☑ ハザードが新規のものであり、簡単にはわからないとき
(ex.携帯電話の電磁波影響, 福島第一原発事故のような複雑性(Natech))
- ☑ ハザードが身近なとき (例: ゴミ焼却炉)。

#この種のハザードは現在進行形であったり、経済的アドバンテージを持つ場合には、その認知はより複雑なものとなる。

ex. 「ハザード環境で労働することで報酬を得ている人はハザードに対する心理的耐性を持つ」

from Anderson and Spitzberg(2009), edited

リスク認知が高まる条件：人間はリスク情報についてバイアスがかかる

リスク認知が高まるハザード条件（続）

☑ ハザードが子ども達に対するリスクとなるとき

（ex.チャイルドシートの構造不良のような現実イメージしやすいもの／ワクチンのように想像性を必要とする場合）

☑ ハザードに関連したリスクが予見可能であり、幾つかの理由によって道義的に拒否反応を引き起こし、人々に対して不公平な影響を与えうるとき（ex.テロによる被害）

from Anderson and Spitzberg(2009), edited

リスク認知を高めるその他の重要な要因

☑ 信頼：リスクの情報源が信頼されていないとき、あるいは特に、以前は信頼されていたが今や信頼できないと思われるとき。

→会社、政府や行政などの組織体が、しばしば直面する問題

☑ メディア：リスクがニュースメディアやソーシャルメディアといった公共のコミュニケーション手段によって強調されているとき。

ex.福島第一原発事故後の諸問題

リスクメッセージ作成の7処方箋 (1-3/7)

1) メッセージは明快でわかりやすくなければならない。

☑ ジャーゴン（専門用語）や不要な数字の使用を避ける

☑ 「わかりやすさ」は常に情報の欠落を意味する

→オーディエンスが絞られる／誤解を先読みする必要がある／
欠落にはいずれ気付く（それが「隠蔽」と受け止められることも）

2) 起こりうる誤解に対して注意を払い続けなければならない。

☑ 社会心理学的知識の習得

☑ 事例に普段から興味を持つこと

☑ 頭ごなしに誤解を正そうとしてはいけない！

→特に被害が現実的な場合、聴衆のリスク認知／バイアスは最高度に高くなっている

3) 情報を提供することと、影響を与えようとするものの区別について自覚的でなければならない。

☑ 公衆は彼らに影響を与えようとするメッセージを敏感に察知する

☑ 影響を与えようとするメッセージが失敗する状況

(1) リスクが公共的議論を含んでいるとき

(2) 隠蔽を目的としたコミュニケーション戦略

(3) 自ら望んで選択して曝露したときのみ、リスクが個人に影響を与えるような状況

(Heath & O'Hair, 2009; Lundgren & McMakin, 2009; McComas, 2006; NRC, 1989; Trumbo, 2001)

リスクメッセージ作成の7処方箋 (4-6/7)

4) 個人に対する影響を提示する必要がある。

- ☑ 科学的分析結果は、個人に対するアドバイスに翻訳されなければならない。
- ☑ 同時に、自律的判断への道筋が示されなければならない。
- ☑ 将来の情報収集への道筋が付けられなければならない。
+ (特に対面の場合) 発話者の個人的価値観の提示は説得的 (だがメディアには不向き)

5) 不確実性を明示しなければならない。

- ☑ データの不完全性、専門家の合意できない点 (合意できている点)
(cf. 低線量被曝)
- ☑ バランス問題: 不確実性を誇張しても矮小化しても信頼は失われる!
- ☑ 公共政策の場合、異なる複数の観点を提示することは重要
同時に「なぜある観点を選択するのか」も明示する。 → 「**手続き的公正性**」が重要!!

6) 「リスク比較」は使いこなすのが非常に難しいと意識しなければならない。

- ☑ しばしば頼ってしまいがちだが、しばしば間違っている。
- ☑ ほぼ類似するリスクとの比較が基本。

ex. 失敗事例: 「福島原発事故後の被曝量と喫煙によるがんリスクの比較」

(Heath & O'Hair, 2009; Lundgren & McMakin, 2009; McComas, 2006; NRC, 1989; Trumbo, 2001)

リスクメッセージ作成の7処方箋 (7/7)

7) リスクメッセージは能う限り完全（包括的）でなければならない。

- ☒ 不完全な情報は、そこから綻びが拡大する。
- ☒ そしてその綻びを繕うのは最初に手間をかける以上に大変。
- ☒ 完全なリスクメッセージに求められる5要素（5つの問い）：

1.現在のリスクの有り様は？

→科学的リスクではなく社会学的リスクも考慮する。

2.リスクとベネフィットの関係性は？

→ベネフィットを推しすぎると説得と誤解されるので注意。
究極的にはベネフィットは怪しい。

3.他の選択肢は何があるか？

→自律的選択肢を提示した上で推奨する。

4.不確実性はどの程度か？

→今後の見通しも含めて提示する。

5.専門家にとってリスク管理がどの程度難しい状況なのか？

→ここまでわかっていて、ここからわからない、と堂々と述べる方が信頼される。

(Heath & O'Hair, 2009; Lundgren & McMakin, 2009; McComas, 2006; NRC, 1989; Trumbo, 2001)

まとめ：リスクコミュニケーションは「ジレンマに向き合う行為」

グローバル社会は、リスク社会へと向かっていく

- 次々に生まれるリスク：一個の人間は全てを考慮できない.
- 「信頼」によって生きる複雑さを縮減し、管理しようとする.
- しかし、個々人がリスク判断を求められる.

リスクは”お上が管理してくれる”ことが”普通”だった日本社会？

- ☑ 「『リスクを市民1人1人が理解して対処する』社会は、
政府／行政の責任放棄と受け取られるのではないか？」

「統治者視点」vs.「当事者視点」

- ☑ 解消できない視点の差（同一人物が立場により両方の視点を持ちうる）
- ☑ しかし、統治者／当事者がどちらかの視点しか持てないという意味では無い。
→ ポリオワクチン報道分析：厚労省 vs. 黒岩知事 という
図式が「両者を益した」とも言える(楊,2014)
- ☑ 態度変容の準備がステークホルダー双方に無ければ
「コミュニケーション」は成立しない！

～ご静聴有り難うございました！～



田中 幹人 steman@waseda.jp <http://smc-japan.org>